

# 地方創生の音楽社会学

神戸学院大学 金子勇

## 1 目的

「少子化する高齢社会」に対応すべく、内閣府による兆単位の予算が付けられた「地方創生事業」では、「まち、ひと、しごと」のうち「しごと」を増やし、定住者増加がめざされてきた。しかし、三者の関連は不鮮明なまま、全体として「地方創生」には程遠い。そこで論文著書による研究成果とともに、音と動画を駆使した音楽社会学的手法により、「ひと」の動きを増すためにオリジナルな楽曲を媒体要因にしてみた。

## 2 方法

表現手段を文字から音に変えて、自ら「丹波篠山風の音」と「神戸坂道四季の音」を作詞・作曲した。それぞれの歌詞は簡単な七五調で、六行で三番までに限定した。一番だけで72文字（12文字×6行）、三番までの合計が216文字になる。自然、四季の移り変わり、景観、歴史、文化、産業などを歌い込み、短調で作曲した。歩き回る雰囲気は、かつて研究した吉田メロディと同じく三連符と付点八分音符を多用し、ベース音を響かせて、13度の音域でメリハリをつけて表現した。メロディとリズムとご当地ソング的ストーリーをもたせて、地方創生の雰囲気を醸し出そうとした。

## 3 結果

作詞作曲のあと、専門業者に編曲してもらい、音源を作りカラオケ版を作成した。その後に紹介された複数の歌手候補から、2作品にふさわしいと私が判断した歌手に依頼し、そのデモテープを数回チェックして、専門業者に歌入りCDを制作してもらった。この期間に、私が現地で動画と写真を撮影した。歌詞に合わせて、私が動画と写真を配列し直して、専門業者に映像化したDVDを作ってもらい、そのままYOUTUBEにあげた。その結果、「丹波篠山風の音」は2月14日からのアクセスが1ヶ月で300回を超え、2ヶ月で700回を超え、3ヶ月で1000回に到達した。同じく5月11日にYOUTUBE登場の「神戸坂道四季の音」は20日で240回を越えた。いずれも毎日平均10件程度のアクセスが続いている。

## 4 結論

交流人口や関係人口という昼間の「ひとの流れ」が増えれば、地方創生の「まち、しごと」にも寄与できるという仮説なので、YOUTUBEだけではなく全国でも歌えるように、ジョイサウンドでの審査を受けて、2曲ともにカラオケで配信した。「まち、ひと、しごと」の融合はいいが、もはや定住者増加は無理なので、全国の「ひと」がそこで交流し、関係しあう動きの土台作りにはこの試みも少しは役に立つかもしれない。たまたま機会があり、令和元年5月に丹波篠山市長や兵庫県知事にもCDを差し上げた。「ひと」の動きが増えて、行政が何かを仕掛けると、YOUTUBE動画とカラオケもまた、文字だけの地平を超えて新生面を生み出すのではないか。学問論的には、「音楽と社会」を手掛ける音楽社会学の役割を、現代日本が直面する地方創生でも活用して、方法論的イノベーションを行った。さらに既存の文化現象の解釈を行う文化社会学の先に、文化現象を自ら創出するという新しい社会学の課題を設定できたことになる。

金子勇,2010,『吉田正』ミネルヴァ書房

金子勇,2016,『「地方創生と消滅」の社会学』ミネルヴァ書房